[コラム] 佐渡相川の歴史的変遷

相川は16世紀末に発見された国内最大の相川金銀山の開発に伴って成立した鉱山都市である。初期の開発に伴って、採掘地に近い丘陵部に20haの広さをもつ上相川鉱山集落が短期間に成立した。街路が計画的に配置され、鉱山労働者の住居や選鉱・製錬をおこなう作業場の他、寺社や遊郭も存在する都市的な場であった。

17世紀前半に最盛期を迎えた金銀山は、江戸幕府の直轄地とされ、初代奉行である大久保長安によって金銀山を支える相川の都市計画がおこなわれた。海辺の寒村であった相川は人口4~5万人を擁する鉱山都市へと発展し、鉱山と労働者を支えるため、海岸部に番所が設けられ、様々な物資を搬入した。人口増に対応するため、海成段丘上で水田開発が進行し、金銀の積出港である小木への公道(相川往還)も整備された。金銀山の繁栄によって、他国から移住した人々が信仰した寺社や、祭礼、芸能等の文化ももち込まれ、「日本の縮図」と呼ばれる佐渡の基層文化が形成された。

18世紀頃から金銀山は衰退し、丘陵部の上相川集落 は衰退していった。町中に分散していた選鉱、製錬作業 場は、奉行所内の寄勝場、寄床屋に集められ、一元的な 管理がおこなわれるようになった。江戸時代末期には、 減産による厳しい状態が続いたが、幕府は金の重要性から金銀山を維持し続けた。

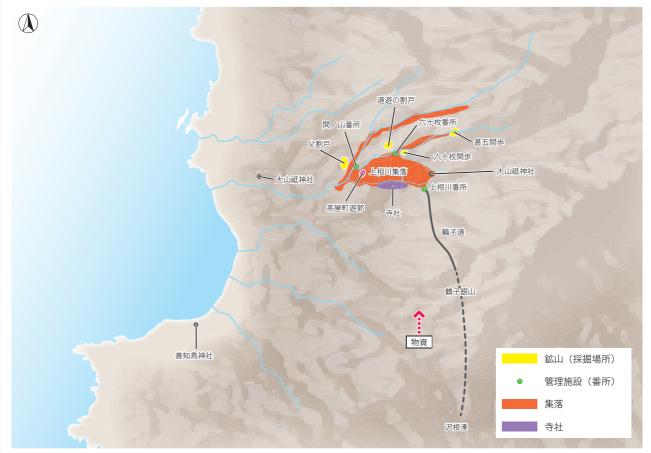
明治維新後は、海外の技術導入によって機械化がはかられ、大立竪坑等、金銀山の様相は一変した。幕府の施設は、時代によって佐渡県庁等の行政施設や学校等に変わっていったが、伝統的な町家は鉱山労働者の住宅として使用された。

その後、鉱山は三菱に払下げられたが、第2次世界大戦中には、金の大増産のため、現存する様々な施設の建設が図られた。国内各地や朝鮮半島からも多くの労働者が雇用され、寮や共同炊事場、浴場、鉱山倶楽部などが新設された。

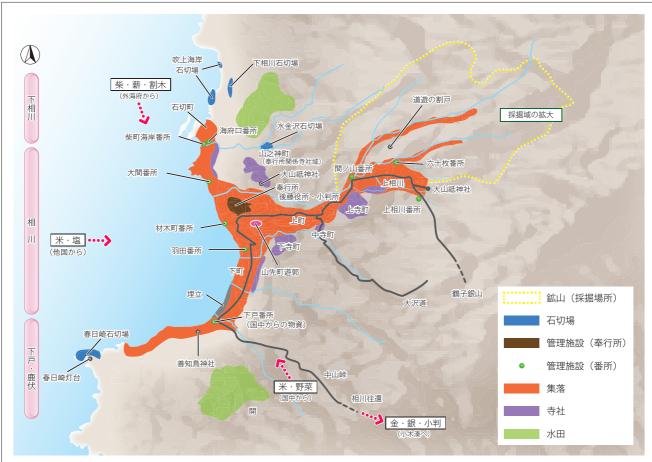
戦前の乱掘によって、戦後は急激に産出量が減少し、昭和27年(1952)に鉱山は大縮小され、多くの労働者が国内の他の鉱山へ転出させられた。平成元年(1989)には休山を迎え、鉱山の歴史に幕を下ろすこととなった。現在は、(株)ゴールデン佐渡によって観光施設として整備され、多くの観光客を迎えている。

このように、相川は 400 年間の歴史が重層的にみられる鉱山都市の文化的景観として貴重な存在である。

(小田由美子)

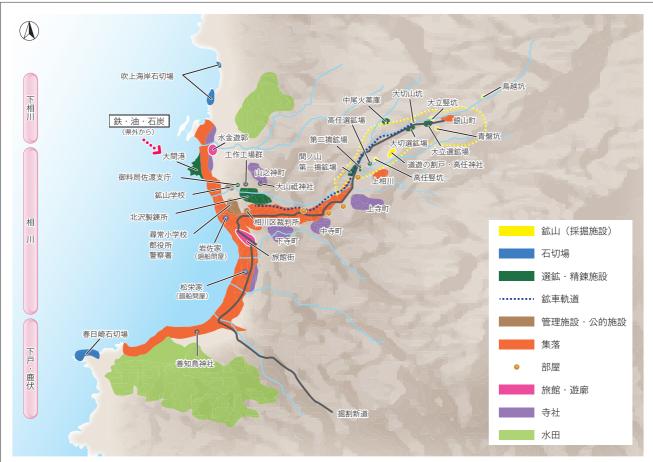


(1) 17世紀初頭:相川金銀山の発見期



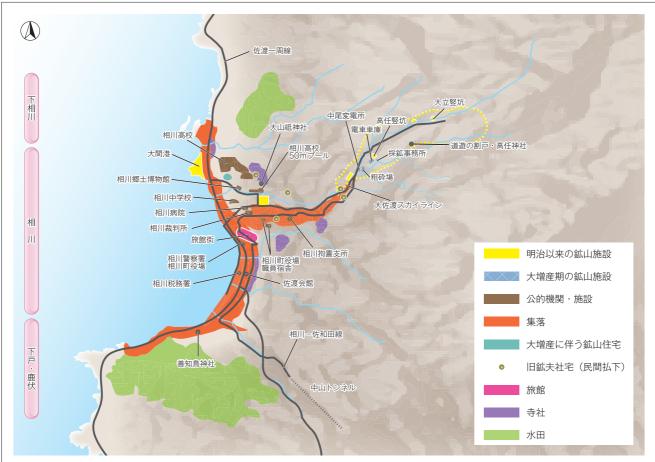
(2) 17世紀中葉:相川金銀山の最盛期





(4) 19世紀末:佐渡鉱山の近代化





(6) 1960年代~1970年代:佐渡観光の隆盛期

